

# 「引揚げ体験記」

組合員のみなさまに戦争体験や被爆体験、県内に残る戦跡の紹介を募っています。  
今回、佐世保市の組合員より戦争体験のお手紙をいただきましたので、ご紹介します。

## 「引揚げ体験記」

昭和二十年八月十五日、天皇陛下下の「玉音放送」を聞く。この日が終戦を迎え戦後の始まりだった。

ここは中国の太原市。両親が呉服店を営んでいた。当時私は八才、国民小学校二年生だった。一人っ子だったが店には住み込みで働く中国人も何人かいて家族のようににぎやかで何不自由ない暮らしだった。が、この日を境に生活は一変した。これまでに築き上げた資産等全てを没収され、早くも半年後には、日本への引揚げが決まった。

翌二十一年二月、小学校が引揚者収容所となり、まったくの着の身、着のまま、リュックサック一つの荷物で両親と私、そして大勢の引揚者と共に入所した。

一週間程して、いよいよ出国する事となり太原の駅から貨物列車に乗り、(※①)タンクー塘沽の港駅へと向かった。その途中何人かのロシア兵に列車を止められた。

「閉門!!閉門!!」と大声で叫びながらドアを叩いた。皆で内側からドアをしかり閉めて息をひそめてジッと固まっていた。ドアを開けられたらと思っとうとでも恐ろしかった。しばらくしてロシア兵も諦めたのか静かになり列車が動き出した。そして無事塘沽に到着した。港には大きな船が停泊していた。皆で乗り込み、そして中国を出港した。

船内でも悲しい事があった。病弱だった幼児が薬もなく、手当てを受ける事も出来ず亡くなった。その遺体は黙祷の後静かに海に流された。ああ...。

出港して五日目の朝だったと思う。「内地が見えたぞ!」と誰かの叫び声が出て甲板に上がった。遠くに島が見えた。無事日本へ帰ってこれた事、喜びがあった。

佐世保浦頭に上陸した。そこで消毒の為と言われ(※②)DDTなるものを、頭の上から足元まで真白にかけられた。その後、少し歩いてからトラックに乗り、針尾の引揚者収容所(現ハウステンボス)到着。そこに宿泊しながら順次各々の帰る所へ送り出される事となった。

終戦からこれまで大変な体験をしたが、この日本の広島・長崎の原爆被災での現実を見聞して、あまりの惨状に驚きとても心痛んだ。戦争がいかにむごいものであるか、二度とあってはならない。世界が平和であることを心から願っている。

佐世保市 鶴崎絹恵

八十六才

【注釈】※①...天津近郊の地名

※②...シラミ駆除のための殺虫剤

### 鶴崎絹恵さん取材レポート

『卓球が楽しい!買い物は徒歩で。』と明るく健康的に暮らしている鶴崎さん。これまでご家族にも明かさなかった戦争体験を投稿して下さいました。あまりにも強烈に残る戦争の記憶。戦後78年経った今でも鮮明に思い出せるという事実に、私たちは大変心が痛みました。取材後、浦頭平和記念公園を訪ねました。浦頭港を一望できる小高い丘に立ち、鶴崎さんが語られた光景を想像すると、なんとも言葉にならず沈痛な思いでした。敷地内の浦頭検疫所跡(長崎県佐世保市針尾北町)に建立された供養塔(※右写真)に手を合わせ、平和への想いを新たに帰路につきました。



戦後の引揚げで命を落とし茶毘に付された人を追悼する供養塔

「あなたの戦争体験」やあなたの町に「今も残る戦跡」を募集しています

お問合せ 生活協同組合ララコープ 組合員活動部 (土岐・大塚) 0120-063-087 平日9:00~18:00 土・日休み